東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。これまでにベルリン・フィル、ウィーン・フィル、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、フランス放送フィル、ロイヤル・フィル、シカゴ響、ボストン響、モントリオール響などへ客演。新日本フィル音楽監督、ウィニペグ響音楽監督、都響指揮者／首席指揮者／首席客演指揮者／レジデント・コンダクター、九響首席指揮者、日本センチュリー響首席客演指揮者／首席指揮者／音楽監督、仙台フィル首席客演指揮者などを歴任。

現在、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、名古屋フィル音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者を務めている。

Kazuhiro Koizumi studied at Tokyo University of the Arts and at Universität der Künste Berlin. After winning the 1st prize at Karajan International Conducting Competition in 1973, he has appeared with Berliner Philharmoniker, Wiener Philharmoniker, Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Orchestre philharmonique de Radio France, Chicago Symphony, Boston Symphony, and Orchestre symphonique de Montréal, among others. Currently, he serves as Honorary Conductor for Life of TMSO, Music Director of Kyushu Symphony, Music Director of Nagoya Philharmonic, and Special Guest Conductor of Kanagawa Philharmonic.

都響・八王子シリーズ
Hachioji Series

TMSO

オリンパスホール八王子

2019年4月6日(土) 14:00開演
Sat. 6 April 2019, 14:00 at Olympus Hall Hachioji

指揮 ● 小泉和裕 KOIZUMI Kazuhiro, Conductor
ヴァイオリン ● 米元響子 YONEMOTO Kyoko, Violin
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.35 (35分)
Tchaikovsky: Violin Concerto in D major, op.35

Ⅰ Allegro moderato - Moderato assai
Ⅱ Canzonetta: Andante
Ⅲ Finale: Allegro vivacissimo

休憩 / Intermission (20 分)

チャイコフスキー：交響曲第4番 へ短調 op.36 (44分)
Tchaikovsky: Symphony No.4 in F minor, op.36

Ⅰ Andante sostenuto - Moderato con anima
Ⅱ Andantino in modo di canzona
Ⅲ Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro
Ⅳ Finale: Allegro con fuoco

主催：公益財団法人東京都交響楽団

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

YONEMOTO Kyoko

Violin

米元響子

ヴァイオリン

1997年パガニーニ国際ヴァイオリン・コンクール（イタリア）において史上最年少13歳で入賞後、日本音楽コンクール、モスクワ・パガニーニ国際ヴァイオリン・コンクールで優勝を飾る。ほかに、ロン＝ティボー、エリザベート、フリッツ・クライスラー各国際コンクールでも上位入賞。これまでに日本国内の主要オーケストラはもとより、モスクワ国立響、リンブルフ響（オランダ）、ベルギー王立リエージュ・フィル、ビルバオ響（スペイン）など海外オーケストラとも多数共演。室内楽の分野でも高い評価を受けている。現在、オランダ・マーストリヒト音楽院教授。

2019年3月、キングインターナショナルより初のCD『イザイ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ全曲（未完の新発見ソナタも含む）』を発売。使用楽器は1727年製ストラディヴァリウス（サントリー芸術財団より貸与）。

Kyoko Yonemoto was born in Fukuoka in 1984. In 1997, at the age of thirteen, she became the youngest prize winner ever at Premio Paganini in Italy. She later won the 1st prize at Music Competition of Japan in 2001 and Paganini Moscow International Competition in 2006. Yonemoto has performed with orchestras including Moscow State Symphony, Limburg Symphony, Orchestre Philharmonique royal de Liège, and Bilbao Symphony. She is a professor at Conservatorium Maastricht in Netherlands. She plays a Stradivarius violin (1727) on loan from Suntory Foundation for Arts.

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.35

この名曲は、エドゥアール・ラロ（1823～92）のヴァイオリン協奏曲第2番《スペイン交響曲》に刺激され、生まれた。

スペインの血をひくフランスの作曲家ラロが、《スペイン交響曲》をパリで発表したのは、1875年2月のことである。独奏はスペインの名手、パブロ・デ・サラサーテ（1844～1908）だった。

この音楽はたちまちヨーロッパに広く知られた。発想が新しかったからである。

1860年代以後、スラヴ圏を中心に、民族的な楽想を積極的に盛り込もうとする作曲家たちが台頭していた。スメタナのオペラ『売られた花嫁』は1866年、ムソルグスキーのオペラ『ボリス・ゴドゥノフ』は1874年に初演されている。

しかし、こうした作曲家たちにとり、厄介な分野が交響曲や協奏曲だった。オペラや組曲のように旋律そのもので勝負できる楽曲なら、民謡的素材を持ってこられる。けれども、交響曲や協奏曲は、特にベートーヴェン以来、主題をいかに複雑に展開できるかを、作曲家が競い合う分野になってきた。民謡風の単純な旋律は、複雑な細工には向いていない。民族色を盛り込みたい作曲家には、その分野は不向きということになる。

ラロは、そこに風穴を開けた。《スペイン交響曲》は、主題を論理的に展開するよりも、素材となるスペイン風の旋律自体の味に頼り、論理の不足する分をヴァイオリンの名人芸の追求で補って、見事に成功した。

民族色を出したい作曲家のひとり、ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、このラロに倣えば、自分にもヴァイオリン協奏曲が書けると思った。そうしてできたこの作品の世界初演を聴いた大批評家、エドゥアルト・ハンスリック（1825～1904）は、案の定「この協奏曲には論理が不在で下品」と酷評した。しかし、再演を重ねる度に、聴衆はスラヴの力強い節回しと独奏楽器の名技性に魅了されてゆき、じきに名曲と認められ、今日に至っている。

第1楽章　アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ　ニ長調　自由なソナタ形式。ソナタの定石では、動きと変化のあるのが第1主題で、落ち着いた歌謡的なものが第2主題だが、この楽章は逆。第1主題は朗々と歌い、第2主題が走句のようになっている。素朴な歌で直球勝負ということだ。

第2楽章　カンツォネッタ／アンダンテ　ト短調の、内に情熱を秘めたスラヴ的歌謡主題の間に、変ホ長調の、より西欧的でクラシックな音楽が挟まる。切れ目なく終楽章へ。

第3楽章　フィナーレ／アレグロ・ヴィヴァチッシモ　ニ長調　スラヴの民俗舞曲のリズムを赤裸々に出したフィナーレ。これはもう、ラロの《スペイン交響曲》やサラサーテの《ツィゴイネルワイゼン》と文句なく同時代の音楽である。

（片山杜秀）

作曲年代：1878年3～4月
初　　演：1881年12月4日（ロシア旧暦11月22日）　ウィーン
アドルフ・ブロツキー独奏　ハンス・リヒター指揮　ウィーン・フィル
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー：交響曲第4番 ヘ短調 op.36

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、1877年12月（ロシア旧暦／以下同）に書き上げた交響曲第4番をナジェジダ・フォン・メック（1831～94）に捧げている。鉄道王の未亡人として莫大な遺産を相続した彼女との間には、1876年の暮れに文通が始まった。1890年までメック夫人から毎年巨額の資金援助を受けていたが、実際に会うことは一度もなかったという不思議な関係である。ともかくこれで創作活動に弾みがついたことは疑いなく、1877年5月初旬の時点で交響曲第4番は第3楽章までスケッチが進み、並行して歌劇『エフゲニー・オネーギン』まで着手をみていた。

チャイコフスキーがわずか2ヵ月で破綻する不幸な結婚生活を経験したのは、その直後のことだ。ごく短期間だがモスクワ音楽院で教え子だったと称する（彼は覚えていなかったらしい）アントニーナ・ミリュコーヴァ（1848～1917）という女性から3月に求愛の手紙が舞い込んだ。5月20日に初めてデートして3日後に婚約、7月6日に挙式という“スピード婚”に踏み切った理由は謎でしかない（彼は同性愛者だったという説も根強いだけに、ことさらに疑義の念がつのりもしよう）。

結局のところ、夫妻はわずか3週間で別居状態となり、チャイコフスキーは妹の嫁ぎ先のウクライナのカメンカへ身を寄せる。9月にモスクワへ戻った彼がアントニーナと過ごした12日間をもって、両者の関係は終了を迎えた。その後チャイコフスキーが友人に宛てた手紙には「あと1日遅かったら、自分はもう気が狂ってしまったか、モスクワ川に身を投じていたかもしれない」という意味の言葉が記されている（彼がモスクワ川に腰まで浸かって身を沈めようとしていたのを通りがかりの人に助けられた、という有名な逸話は、そこから尾ひれがついた形で広まった可能性もなくはない）。とも

あれ精神の安定を求めるべくロシアを離れたチャイコフスキーは、スイスやウィーンやヴェネツィアの地で交響曲第4番の筆を進め、12月にイタリアのサン・レモでスコアが完成に至った。

初演の1週間後にメック夫人へ宛てた手紙の中で作曲者はこれを「私たちの交響曲」と呼び、各楽章の標題的内容について語っている。

第1楽章　序奏（**アンダンテ・ソステヌート**）で鳴りわたる動機は、その文面によれば“作品全体の種子”であり、“幸福を望む我々の前に立ちはだかる運命”を表す。楽章主部（**モデラート・コン・アニマ**）は構えの大きいソナタ形式。ワルツのリズムで哀しげな歩みを続ける第1主題は“その力の前に我々は嘆くことしかできない”という言葉と呼応するものだろう。木管楽器のソロで始まる第2主題部では“現実から逃避した空想”が“魂を甘く包み込む”。楽章全体を貫くのは“人生のすべては辛い現実とはかない夢の連続。安息の場はない”というテーマだ。

第2楽章　**アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ**　“過去の追憶が様々な形でよぎる、その哀しさと心地よさ”を、メランコリックな主部と動的な中間部を対置させながら描いていく。

第3楽章　**スケルツォ／ピッツィカート・オスティナート／アレグロ**　指先で弦を弾く弦楽器のアンサンブルが“ほろ酔い気分の頭に明滅するイメージ”を視覚化。管楽器が加わる中間部は“遠くを通り過ぎる軍楽隊”の調べだ。

第4楽章　**フィナーレ／アレグロ・コン・フォーコ**　祝祭的な第1主題と、ロシア民謡「野に白樺の樹が立っていた」を用いた第2主題が交替する形で進み、“運命の動機”の劇的な回帰を経て、勝利の凱歌にも似たコーダで閉じられる。“心に喜びが見出せないなら、民衆の中に身を置き、他人の喜びを自分のものとせよ”という人生肯定的な口調のフィナーレ。

（木幡一誠）

作曲年代：1876～77年
初　　演：1878年2月22日（ロシア旧暦2月10日）モスクワ
　　ニコライ・ルビンシテイン指揮
楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部

4/20 4/21 4/26

ONO Kazushi

Music Director

大野和士

音楽監督

都響およびバルセロナ響の音楽監督、新国立劇場オペラ芸術監督。1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。これまでに、ザグレブ・フィル音楽監督、都響指揮者、東京フィル常任指揮者(現・桂冠指揮者)、カールスルーエ・バーデン州立劇場音楽総監督、モネ劇場(ベルギー王立歌劇場)音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者を歴任。フランス批評家大賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。2023年3月まで3年間、都響音楽監督の任期が延長された。

2017年5月、大野和士が9年間率いたリヨン歌劇場は、インターナショナル・オペラ・アワードで「最優秀オペラハウス2017」を獲得。自身は2017年6月、フランス政府より芸術文化勲章「オフィシエ」を受章、またリヨン市からリヨン市特別メダルを授与された。

2019年2月、新国立劇場で大野＝都響は初めてピットに入り、芸術監督として自ら企画したオペラ『紫苑物語』の世界初演を指揮。質の高い上演で大きな話題を呼んだ。

Kazushi Ono is currently Music Director of Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra, Music Director of Barcelona Symphony Orchestra, and Artistic Director of Opera of New National Theatre, Tokyo. He was formerly General Music Director of Badisches Staatstheater Karlsruhe, Music Director of La Monnaie in Brussels, Principal Guest Conductor of Filarmonica Arturo Toscanini, and Principal Conductor of Opéra National de Lyon. He received numerous awards including Palmarès du Prix de la Critique, Officier de l'Ordre des Arts et des Lettres, and Asahi Prize. He was selected to be a Person of Cultural Merits by the Japanese Goverment. TMSO announced that the term of Ono as Music Director was prolonged until March 2023.

C Series

第876回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.876 C Series

東京芸術劇場コンサートホール

2019年4月20日(土) 14:00開演

Sat. 20 April 2019, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

T TMSO

第57回大阪国際フェスティバル2019提携公演

東京都交響楽団 大阪特別公演

TMSO Special Concert in Osaka

フェスティバルホール

2019年4月21日(日) 14:00開演

Sun. 21 April 2019, 14:00 at Festival Hall

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

ピアノ ● ニコライ・ルガンスキー Nikolai LUGANSKY, Piano

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

グリーグ：ピアノ協奏曲 イ短調 op.16 (31分)

Grieg: Piano Concerto in A minor, op.16

Ⅰ Allegro molto moderato　Ⅱ Adagio　Ⅲ Allegro moderato molto e marcato

休憩 / Intermission (20 分)

【ベルリオーズ没後150年記念】

ベルリオーズ：幻想交響曲 op.14 (52分)

Berlioz: Symphonie Fantastique, op.14

Ⅰ	Rêveries. Passions (Largo - Allegro agitato e appassionato assai)	夢、情熱
Ⅱ	Un bal (Valse. Allegro non troppo)	舞踏会
Ⅲ	Scène aux champs (Adagio)	野の風景
Ⅳ	Marche au supplice (Allegretto non troppo)	断頭台への行進
Ⅴ	Songe d'une nuit de Sabbat - Ronde du sabbat (Larghetto - Allegro)	魔女の夜会の夢～魔女のロンド

主催： 公益財団法人東京都交響楽団、フェスティバルホール（21日）

共催： 朝日新聞文化財団（21日）、朝日新聞社（21日）、大阪国際フェスティバル協会（21日）

後援： 東京都（20日）、東京都教育委員会（20日）

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演（20日）（青少年を年間500名ご招待）協賛企業・団体はP.55、募集はP.58をご覧ください。

YOUNG SEAT ヤングシート

Nikolai LUGANSKY

Piano

ニコライ・ルガンスキー

ピアノ

©Caroline Doutre Naïve

モスクワ中央音楽学校とモスクワ音楽院でタチアナ・ニコラーエワ、セルゲイ・ドレンスキーらに師事。これまでにロンドン･フィル、フィルハーモニア管、サンフランシスコ響、パリ管、スイス・ロマンド管、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、サンクトペテルブルク･フィルなどと共演。リサイタルと室内楽ではウィグモアホール、ベルリン･コンツェルトハウス、ウィーン・コンツェルトハウス、シャンゼリゼ劇場、モスクワ音楽院大ホールなどに登場。BBCプロムス、ヴェルビエ、エディンバラなど音楽祭にも定期的に出演している。2013年に「ロシア人民芸術家」を授与された。タンボフ（モスクワ南東の都市）のラフマニノフ・フェスティバルで芸術監督を務めている。

Nikolai Lugansky studied at Central School of Music in Moscow and Moscow Conservatory. He has performed with orchestras including London Philharmonic, Philharmonia Orchestra, San Francisco Symphony, Orchestre de Paris, Orchestre de la Suisse Romande, Orchestra dell'Accademia Nazionale di Santa Cecilia, and St. Petersburg Philharmonic. Lugansky has appeared at Wigmore Hall, Konzerthaus Berlin, Wiener Konzerthaus, and Théâtre des Champs-Élysées, among others. In 2013, he was named "People's Artist of Russia". Lugansky is Artistic Director of Tambov Rachmaninoff Festival.

グリーグ：
ピアノ協奏曲 イ短調 op.16

古今のピアノ協奏曲でも特に人気の高いこの曲は、北欧ノルウェーが生んだ国民主義作曲家の巨匠、劇音楽《ペール・ギュント》などでも有名なエドヴァール・グリーグ（1843～1907）若き日の傑作だ。

彼はベルゲンで貿易商を営む音楽好きの父と、ドイツやイギリスへ留学してピアニストとしても活躍、文学的な素養も豊かな母とのあいだに生まれた。母の弾くモーツァルトやショパンなどピアノの響きに包まれて育ち、即興詩の朗読にも興味をもち……と、幼くして芸術的なセンスを発揮したグリーグは、少年期から作曲を始めている。

ドイツはライプツィヒに留学し、ピアノと作曲の腕を磨いて帰国した彼は、恋仲だった名家の娘で優れた歌手でもあったニーナ・ハーゲルップ（1845～1935）と（彼女の家の猛反対を押し切って）結婚。質素ながら幸せな新生活が始まったところでグリーグの創作力もいよいよ溢れ出す。生涯にわたって全10集もの《抒情小曲集》にまとめられる小品群も書き始めていたなか、妻にも勧められて1868年のひと夏をかけ取り組んだのが、本日お聴きいただくピアノ協奏曲だ。

1869年4月の初演は大成功。……と、その直前にグリーグのもとへ意外な人から手紙が届いたエピソードも紹介しておこう。全ヨーロッパを席巻した超人ピアニストにして作曲家、フランツ・リスト（1811～86）が、ふとしたことでグリーグの旧作の楽譜を見て才能に感嘆、ぜひ会おうではないか……と招待状を送ってきた。驚いたグリーグは、政府にかけあって給費金をもらい、ローマにいたリストのもとを訪問。会見の前は緊張のあまり気分が悪くなるほどだったグリーグだが、巨匠は青年の作品に大喜び。なんとこの難曲・ピアノ協奏曲を初見で（しかも豪速で）弾きはじめ、「これが真の北欧だ！」と激賞しながら、激情と繊細なニュアンスに富んだ演奏でグリーグを感激させたという。

リストの助言でオーケストレーションを改訂、さらに亡くなる直前にも大改訂を加え、現在の形となった。計画されていた2番目のピアノ協奏曲が遂に書かれなかったのが惜しまれる。

第1楽章　アレグロ・モルト・モデラート　イ短調　ティンパニの轟きに続いてピアノの強打一閃！という冒頭のインパクト。続く主題も、民謡風の素朴な歌がロマンティックに広がってゆく、という心憎いもの。ピアノ独奏の華麗が駆け出したかと思えば、第2主題の息長い歌が抒情を広げ……。ソナタ形式のなか、優しい歌から豪華な響きまで聴き手を昂らせてやまない。

第2楽章　アダージョ　変ニ長調　冒頭、弱音器をつけた弦楽器の響きから、しみじみともの柔らかな雰囲気に包まれる緩徐楽章。細やかな装飾も美しいピアノ独奏、その豊かな技巧が、澄んでのびやかな中にも変化を際立たせてゆく。

第3楽章　アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート　イ短調～イ長調　行進曲のようなリズムが軽く聴こえてくると、すぐにピアノが華やかにきらめく。ロンド・ソナタ形式の力強い音楽に、流れ轟くピアノの雄弁な技巧とオーケストラの大胆とが呼び交わし……。途中、雰囲気をがらりと変えて、フルート独奏が息ながく旋律を吹くと、ピアノが（チェロ独奏が低音を隠し味のように響かせながら!）夢みるように応える中間部も印象的。壮大な輝きを放つ終結部まで、聴衆を魅了する。

（山野雄大）

作曲年代：1868年　1907年の最終稿まで幾度も改訂
初　　演：1869年4月3日　コペンハーゲン　エドムン・ネウペット独奏
楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

ベルリオーズ：幻想交響曲 op.14

「ある芸術家の生涯の挿話」という副題を持つ、この音楽史上有数のエキセントリックでサイケデリックな作品を紹介するには、エクトル・ベルリオーズ（1803 ~ 69）自身の言葉を引用するのが最適かもしれない。「異常に鋭敏な感受性と、豊かな想像力に恵まれた青年芸術家が、失恋による絶望から、アヘンを飲んで自殺を図る。しかし死には至らず、深い眠りに落ちた彼は、一連の奇怪な幻覚を見る。この幻覚が生み出した感情や情緒の記憶は、彼の中で音楽的な心象に変形され、そこで恋人は一つの旋律となり、固定楽想（イデー・フィクス）として彼の耳に繰り返し帰ってくる」

要するにこの作品は、イギリスの女優であるハリエット・スミスソン（1800 ~ 54）への失恋を契機に、自伝をドラッグによる幻覚として表現したというもので、当時の文学的な影響があるものの、いかにもロマン派の体現者ベルリオーズならではの破天荒なものである。

また音楽史上でもこの作品は非常に重要な位置を占めており、標題音楽の幕開けとなったこと、スミスソンを表す固定楽想がワーグナー（1813 ~ 83）のライトモティーフの先駆けとなったこと、管弦楽の用法に新機軸を持ちこんだことなどが大きな特色である。むろんここに満載された多数の刺激的な試みは、後世の作曲家たちに計り知れぬ大きな影響を与えた。

ちなみにこの作品が作曲されたのは1830年だが、それがベートーヴェン（1770 ～ 1827）の死後わずか３年であることは注目に値する。そのことからも、この作品の先進性・前衛性は明白だが、より驚くべきことは、そうした革新性が今日まで輝きを失わず、現代に生きる我々にとっても、今なお衝撃的である点だろう。《幻想交響曲》の存在は、交響曲、いやクラシック音楽を考える上で、決して忘れることのできぬ奇跡の一つである。

第１楽章　夢、情熱　ラルゴ、ハ短調、４分の４拍子の序奏。そしてアレグロ・アジタート・エ・アパショナート・アッサイ、ハ長調、２分の２拍子の主部から成る。ソナタ形式。

冒頭はこれぞ夢幻的、いや曲名どおりファンタスティックである。躁と鬱の間を揺れ動いて訴えかけるような音の身振りや曲の構成と、それを繊細・克明に表現し、遠く印象派すら暗示する冴えに冴えた管弦楽法。早くもこの序奏には、そうした異様に革命的なものがびっしりと詰まり、ベルリオーズの突出した天才を明らかにしている。

極端な音量の対比が一段落すると第１主題、すなわちスミスソンを表す気品と優雅さをもった固定楽想が、フルートと第１ヴァイオリンによって奏され主部となる。そしてこの楽想は、様々に形を変えながら全曲の要所要所に登場する。しかし逆に、第２主題はあまり重要視されておらず、楽章が第１主題を中心に作られていることもあってか、やや印象が薄い。そして音楽は狂乱と沈潜を繰り返しながら、最後に謎めいたプラガル終止（下属和音→主和音へ移行する終止。属和音→主和音へ移行する完全終止よりも柔らかな印象を与える）で幕を閉じる。

第２楽章　舞踏会　ヴァルス／アレグロ・ノン・トロッポ　イ長調　８分の３拍子　美しいワルツが舞踏会の会場に流れる中、青年芸術家はそこに彼女の姿をちらりと見つけて狂喜する。そんな情景が、まるで映画のワンシーンのように描かれる。

第３楽章　野の風景　アダージョ　ヘ長調　８分の６拍子　楽章の冒頭で聴かれる、ステージ上のイングリッシュホルンとステージ裏のオーボエとの対話。それは物語的には２人の牧童の対話となっているが、響きの遠近感や音色の対比という点から見ても面白い。さらに終結部には４台のティンパニによる雷鳴の描写があり、全体は平和な田園詩のようだ。しかし時として現れるスミスソンの姿に、青年芸術家の心はかき乱される。

第４楽章　断頭台への行進　アレグロ・ノン・トロッポ　ト短調　２分の２拍子　音楽の怪奇な度合いはいよいよ増し、ベルリオーズの発想も一層冴えわ

たってくる。青年芸術家は夢の中で彼女を殺害してしまい、その贖罪のためにギロチンの刑となる。おぞましく、おどろおどろしい行進曲と共に、彼は断頭台へ進む。最後の時を迎える寸前にスミスソンの幻を見たのだろうか。しかし次の瞬間、彼の首は飛ぶ。

第５楽章　魔女の夜会の夢～魔女のロンド　これはベルリオーズの天才的で悪魔的な管弦楽法の凄みと魅力が全開した楽章だ。彼は既に死んだ。そして自らの葬式に立ち会っているが、そこには魔女だの妖怪だのといった怪物たちもいる。下品に変わり果てたスミスソンも登場し、世にも奇怪な者たちの夜会が狂ったように盛り上がる。ぶつかり合う骸骨の音、魔女や亡霊たちの甲高く気味の悪い叫び声と笑い声が飛び交い、喧騒と混乱と狂熱のうちに、この世紀の大傑作はエンディングを迎える。

ラルゲット、ハ長調、４分の４拍子で始まり、アレグロ８分の６拍子、アレグロ・アッサイ２分の２拍子、アレグロ（変ホ長調）８分の６拍子と目まぐるしい変化を続けながら、グレゴリオ聖歌《ディエス・イレ（怒りの日）》すらパロディ化されて登場する。そしてついにポコ・メノ・モッソ、ハ長調、８分の６拍子となり「魔女のロンド」に到達する。最後はポコ・アニマートにテンポが上がる。

（石原立教）

※第２楽章「舞踏会」には、コルネットのオブリガートが存在する。《幻想交響曲》が1844年５月４日に演奏された際、作曲者がジャン＝バティスト・アルバン（1825～89／コルネットの名手。金管教本『アーバン』〔英語発音〕を出版したことで有名）のために書き加えたと考えられている。しかし1855年改訂版では採用されず、それをベルリオーズの最終意思としてこのパートを記載していないスコアが多い。本日は指揮者の判断で、オブリガートを加えた演奏となる予定。

作曲年代：1830年1～4月　1831、55年改訂
初　　演：1830年12月5日　パリ　フランソワ=アントワーヌ・アブネック指揮
楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2（第2は小クラリネット持替）、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、テューバ2、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、鐘、ハープ2、弦楽5部、舞台裏にオーボエ

B Series

第877回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.877 B Series

サントリーホール

2019年4月26日(金) 19:00開演

Fri. 26 April 2019, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 大野和士 ONO Kazushi, Conductor

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

武満 徹：鳥は星形の庭に降りる (1977) (13分)

Takemitsu: A Flock Descends into the Pentagonal Garden (1977)

シベリウス：交響曲第6番 二短調 op.104 (28分)

Sibelius: Symphony No.6 in D minor op.104

Ⅰ Allegro molto moderato
Ⅱ Allegretto moderato
Ⅲ Poco vivace
Ⅳ Allegro molto

休憩 / Intermission (20 分)

ラフマニノフ：交響的舞曲 op.45 (34分)

Rachmaninoff: Symphonic Dances, op.45

Ⅰ Non allegro
Ⅱ Andante con moto (Tempo di valse)
Ⅲ Lento assai - Allegro vivace

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：明治安田生命

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

武満徹：
鳥は星形の庭に降りる (1977)

《鳥は星形の庭に降りる》は、サンフランシスコ交響楽団の委嘱で作曲されました。タイトルは、英語で、《A Flock Descends into the Pentagonal Garden》といいます。（一種類の）鳥の群れが、星形をした五角形の庭に降下していくという意味です。作曲の委嘱を受けた年の春に、パリのポンピドゥー・センターで、マルセル・デュシャンの大きな回顧展がありました。そこで見たデュシャンのポートレートに、おそらく、その夢は起因しているのではないかと思います。皆さんすでにご存知だと思いますが、マン・レイがデュシャンの頭部を撮った写真です。彼の後頭部は星形に剃ってあるんですね。その写真を見た夜に、星形の庭の夢を見たのです。

無数の白い鳥が、その星形の庭に向かって舞い降りていくんです。ところが、その中に一羽黒い鳥がいて、それが、群れをリードしていました。私はあまり夢を見ないほうですが、それだけに、その印象は強烈だったのでしょうね。目醒めた時、その風景がとても音楽的なものに思われて、これを音楽にしてみたいと思ったんです。

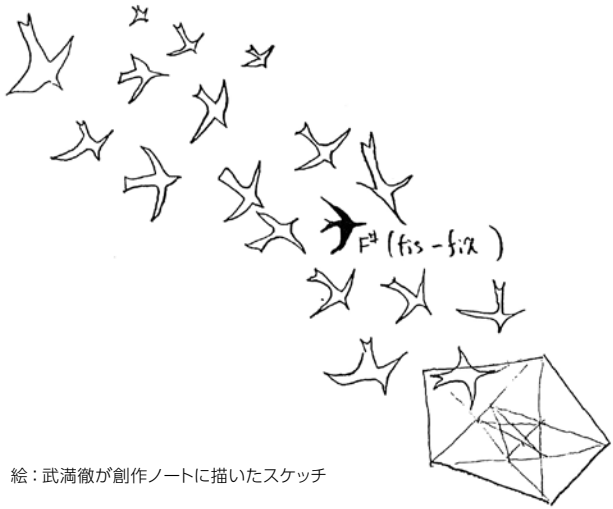
それからずいぶん永いこと、ノートをとって、その夢を反芻しました。その夢から喚起された多くの事柄を逐一メモしていきながら、音楽のタイトルがいつか《鳥は星形の庭に降りる》となったわけです。

この子供っぽい絵はその夢の印象ですが、これを描いた時、たまたま《バイバイ・ブラックバード》という古いジャズを聴いていました。中央の黒い鳥にF♯と記してありますけれど、いつのまにかこの群れを先導する一羽の鳥が、私のなかで、主要な役割を負うことになりました。そして、このF♯を音楽の中心（核音（ヌクレア））にしようと考えていました。

作曲者の解説、写真、スケッチは『武満徹著作集』第5巻（新潮社、2000年）に所収の「夢と数－音楽の語法」（1984年4月30日Studio 200〔東京〕において行われた講演による）P. 16 ～ 18より引用。

武満徹（1930 ～ 96）の代表作《ノヴェンバー・ステップス》（1967）に第2番があったことをご存知だろうか。のちに《グリーン》（1967）と改題されたこの曲には柔和で明るい響きが頻出。いわば後期作品の先駆けとなった作品なのだ。だが、作曲家はこの方向性をすぐに推し進めることはなかった。

1968年1月に、憧れのデューク・エリントン（1899 ～ 1974）を初めて実演で聴いた武満は、彼の魔法のようなサウンドが単なる楽器の組み合わせではなく、各演奏家の個性を活かしたものであったことに衝撃を受ける。それにより、特定の独奏者のために当て書きする作品に一層注力するようになった武満は、加えて1972年末にジャワ島でガムランを体感。1973年には雅楽のために《秋庭歌》



絵：武満徹が創作ノートに描いたスケッチ

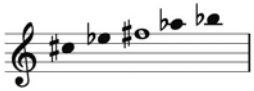
を作曲し、更にはジョージ・ラッセル（1923～2009）によるジャズの音楽理論書『リディアン・クロマティック・コンセプト』からの影響も重なる。こうして《秋》（1973）、《ジティマルヤ》（1974）、《カトレーン》（1975）と、作品を追うごとに旋律が明確さを増し、サウンドも少しずつ軟化していく。

そして《マージナリア》（1976）と共に、独奏者を伴わない新基軸の管弦楽曲として書かれたのが本作だ。前掲の武満自身の言葉やスケッチからも分かるように、視覚的なイメージ喚起が作曲のきっかけとなった。例えば「黒い鳥」は音楽上では、本作の大部分の和音のなかに含まれるF♯（嬰ヘ）によって、「星形の庭」は譜例で示された5音音階と関連させることによって表現されている。

楽曲は、譜例のC♯（嬰ハ）を軸に上下反転させた（反行形）明るい響きで始まる。そこに、これまた「黒い鳥」を表すオーボエの旋律が、主要動機として登場。管楽器が主体となる響きが鳥の群れを、一方の弦楽器は地上に位置する「星型の庭」を表す。つまり両者が絡まることで、鳥の群れが降下していく様を描いているというわけだ。ほとんどの楽器が沈黙するなかで、イングリッシュホルンが冒頭の主要動機を回顧した後、徐々に盛り上がり、破滅的なクライマックスを形成。再び鎮静していくと、3～4秒ほどの総休止が訪れて、全体の折返し地点となる。

後半は、総休止で短めに各セクションを区切りつつ、それまで登場した要素を展開させていく。前半と同じクライマックスが再び訪れたのち、終結部へ。楽曲を構成する基礎となっていた5音音階の派生形がコラールのように奏でられると明転。オーボエが主要動機を回顧して、ロ長調のような響きで曲を結ぶ。

（小室敬幸）



譜例：《鳥は星形の庭に降りる》の基本となる音列。ピアノの黒鍵だけによる5音音階。

作曲年代：1977年
初　　演：1977年11月30日　サンフランシスコ
エド・デ・ワールト指揮　サンフランシスコ交響楽団
楽器編成：フルート3（全てピッコロ持替、第3はアルトフルート持替）、オーボエ3（第3はイングリッシュホルン持替）、クラリネット3（第1は小クラリネット、第3はバスクラリネット持替）、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、大太鼓、チャイム、マリンバ、ヴィブラフォン、サスペンデッドシンバル、タムタム、ゴング、カウベル、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部

シベリウス：
交響曲第6番 二短調 op.104

フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス（1865 ～ 1957）が交響曲第6番（1923）の楽想を最初にスケッチしたのは、1914年秋である。1914年といえば、ノーフォーク音楽祭に招かれたシベリウスが生涯唯一のアメリカ公演を成功させた年であり、第１次世界大戦（1914 ～ 18）の勃発で経済的困窮に陥りながら、交響曲第５番（1915、1916/1919改訂）の作曲を精力的に始めた時期でもあった。創作意欲に溢れていた当時のシベリウスのスケッチ帳には、数多くの楽想が雑然と書き綴られている。

興味深いことに、その中には後期創作期の大作、すなわち交響曲第５番から交響詩《タピオラ》（1926）までの楽想を全て見出すことができる。50歳を迎えようとしていた円熟期のシベリウスを大いに悩ませたのは、インスピレーションに満ちたそれらの楽想を大規模な作品にどのように配分するか、という問題であった。

交響曲第５番の度重なる改訂からうかがえるように、その最初の試みは大変な難産であった。同作品における複雑な形式構成（特に冒頭楽章とスケルツォ楽章の融合）には、シベリウスの苦難の道のりが明確に刻まれている。しかしその壮大で英雄的な音楽は、当時の作曲者の確固とした信念、自信の表れともいえるだろう。そして第５番（最終稿）の完成から４年後、一つの大きなハードルを越えたシベリウスが新たに発表したのは、前作と全く異なる性格の交響曲であった。それが第６番である。

シベリウスの交響曲第６番はきわめて清澄な音楽であり、北欧フィンランドの涼風のようにさわやかで透明な響きに満ちている。作曲者自身、「他の多くの現代作曲家が色鮮やかなカクテルの制作に夢中な一方、私は聴き手に一杯の清らかな水を提供するのだ」と皮肉交じりに述べたという。シベリウスが作品の出来栄えに強い自信をにじませ、その歴史的意義さえ冷静に認識していたことをうかがわせる興味深い言葉である。確かにコンパクトな第６番は、モーツァ

ルト張りの軽やかな印象とは対照的に、数々の斬新な工夫が施されている。とりわけ交響曲全体にアルカイック（古風）なドリア旋法（教会旋法の一つ）のシステムを取り入れたことで、これまでの調性音楽の枠組みを大胆に乗り越えようとしている点は特筆に値するだろう。

交響曲第６番は伝統的な４楽章制が採られている。しかしシベリウスによると、「（第６番の各楽章は）形式的にまったく自由である。それらは、いずれも慣習的なソナタ形式の図式にしたがっていない」という。ソナタ形式やロンド形式に代表される従来の構成では、いくつかの対照的な調域の配置（たとえばハ長調とト長調、ニ短調とヘ長調など）とそのコントラストを主軸に、メリハリある展開を行うのが一般的であった。

しかし第６番の発想は上記と根本的に異なり、ドリア旋法が大胆に応用されたことで、明確な調的コントラストの形成と慣習的な形式デザインの踏襲が退けられている。その結果、交響曲全体が光と影の織りなす幻想的な風景画のような趣きをたたえることになったのである。初期創作期の大作《クレルヴォ》（1892）以降、シベリウスはさまざまな旋法を巧みに用いて、時空を超えた「遥かな響き」を生み出そうと試みてきたが、第６番はその集大成といってよい。

第１楽章　アレグロ・モルト・モデラート　清々しいポリフォニック（多声的）な書法が特徴で、曲の冒頭に現れる弦楽器の下降音型、それに続く木管楽器の断片的な楽想にもとづいて自由に展開していく。冒頭の素材は全楽章を有機的に統一する役割を担い、曲の節々で「かすがい」のように姿を現す。

第２楽章　アレグレット・モデラート　室内楽のような趣きをたたえた淡い緩徐楽章風の音楽。楽章の後半（ポーコ・コン・モート）は弦楽器による木々のざわめきのような伴奏形に変わり、木管楽器が鳥のさえずりを思わせる短いフレーズを印象的に奏でる。

第３楽章　ポーコ・ヴィヴァーチェ　付点リズムによる勇壮な曲調に彩られたスケルツォ風の楽章。「タッタ、タッタ」という付点リズムが途絶える合間に奏でられるヴァイオリンと木管楽器の流麗な旋律が、曲にしなやかなアクセントを与えている。

第４楽章　アレグロ・モルト　これまで登場した楽想が、さまざまに姿を変えて結びつきつつ緻密に進行していく。やがて大きな盛り上がりを見せるが、曲の結尾（ドッピオ・ピュ・レント＝２倍の遅さで）ではあらゆる現実的な想念を超越し、遥かなる世界を憧憬するかのように暖かく、そして静かに幕が下ろされる。

（神部 智）

作曲年代：1914～1923年
初　　演：1923年2月19日　ヘルシンキ大学講堂　作曲者指揮　ヘルシンキ・フィル
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、ハープ、弦楽5部

ラフマニノフ：交響的舞曲 op.45

ロシアの作曲家でピアニストのセルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は1917年、ロシア革命を避けて出国し、ヨーロッパ経由で1918年にアメリカに移住した。以後彼は生涯の終わりまで帰国する機会を失い、アメリカとヨーロッパを行き来しながら活動するが、生活のためもあってピアニストとしての仕事に忙殺されることになる。そのせいで後半生の外国時代は、四半世紀の長き年月にもかかわらず、作品数は極端に少ない。しかし少数ながらも後半生の作品は充実した作風を示している。

その彼の最後の作品となったのが《交響的舞曲》で、1940年夏にロングアイランド（ニューヨーク州南東部）の別荘で短期間で集中的に作曲された。８月中に２台ピアノの形で全曲を仕上げ、フィラデルフィア管弦楽団の指揮者ユージン・オーマンディ（1899～1985）に手紙で初演を依頼し、９月から10月にかけてオーケストレーションがなされている。

題名どおり舞踏的な性格を持つ３曲からなる交響曲風の管弦楽曲だが、舞踏的なリズムのうちにも、第２次世界大戦（1939～45）の不安の時代にあって母国ロシアへの想いと自らの運命を表すかのように、陰鬱な悲劇性とメランコリックな情感に満ちた幻想的な作品となっている。ロシア・ロマン派の流れを汲むラフマニノフらしいスタイルのうちにも、暗い錯綜とした響きが現れる点に後期の彼の特徴が窺えよう。

タイトルはもともと《幻想的舞曲》とされ、さらに当初「朝」「正午」「晩」と名付けられていた各楽章は､途中で「昼」「黄昏」「真夜中」の題に変更された。これらの楽章題や、曲中における過去の自作等の引用から、作品を通してラフマニノフは自身の人生を辿ったと考えられている。しかし最終的には各楽章の題は削除され、作品名も交響曲風の性格であることを示す《交響的舞曲》とされた。自筆譜の最後には「神に感謝する」という書き込みがあり、作品の内容と照らしても、彼がこの曲を最後の作とするつもりだったことが窺える。作品は初演を務めたオーマンディとフィラデルフィア管弦楽団に献呈された。

第１楽章　ノン・アレグロ　ハ短調　３部形式　主部は不安に駆り立てられるように運ばれる悲劇的な性格のもの。緩やかな中間部は、オーボエとクラリネットの寂しげな対話（1936年の交響曲第３番第１楽章第１主題の伴奏の引用）を背景にアルトサクソフォンが郷愁に満ちた旋律を歌う。ロシアへの募る想いを表すようなその主題はやがて弦を中心に感情の高まりを見せる。

主部の響きが戻った後、最後近く弦に大らかな旋律が現れるが、これは1895年の交響曲第１番第１楽章の主題。この交響曲は初演失敗の衝撃でラフマニノフに自信喪失をもたらした作だが、そうした若き日の苦い思い出がここでは懐かしく回顧されているかのようだ。

第２楽章　アンダンテ・コン・モート（テンポ・ディ・ヴァルス）　ト短調　冒頭の怪奇的なファンファーレ（以後も節目で回帰）と弦のピッツィカートのワルツ・リズムの後、独奏ヴァイオリンに導かれ、イングリッシュホルンとオーボエが主題を歌い、以後“死の舞踏”風のワルツの連なりのうちに幻想と郷愁が交錯しつつ、不気味なムードを生み出していく。

第３楽章　レント・アッサイ～アレグロ・ヴィヴァーチェ　ロ短調～ニ短調　短い序奏を持つ急－緩－急の３部形式だが、楽想の多彩な変化ゆえに錯綜とした印象を受ける。主部は活力あるジーグ風のもので、ロシア正教の鐘の響きも聞こえ、グレゴリオ聖歌の「怒りの日」に似た動機や、自作の教会音楽《徹夜禱（晩禱）》op.37（1914 ～ 15）中の主の復活を歌う第９曲の引用も現れる。

憂愁を湛えた中間部を挟んで主部の動きが戻り、「怒りの日」が死の象徴としてはっきり出現、それに対し前述の《徹夜禱》第９曲の引用や“アレルヤ(Alliluya)”という楽譜の表記が死の超克や主の栄光を示唆する。しかし終結は空虚５度の強烈な和音と死の一撃のようなタムタムの余韻。最後の作品の最後の音におけるこの謎めいた響きは何を意味するのだろう。

（寺西基之）

作曲年代：1940年

初　　演：1941年1月3日　フィラデルフィア
ユージン・オーマンディ指揮　フィラデルフィア管弦楽団

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、アルトサクソフォン、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、トライアングル、タンブリン、シンバル、タムタム、チャイム、グロッケンシュピール、シロフォン、ハープ、ピアノ、弦楽5部